

パレスチナ・イスラエル 問題の

本当の解決とは何か

映画：『ガザ = ストロフ ^{うた} -パレスチナの吟-』
講演：早尾貴紀氏（東京経済大学教授）

ガザ = ストロフ
-パレスチナの吟-

GAZA = STROPHE

PALESTINE



© Jaber Jihad Badwan, 2025

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Images_of_war_23-25_from_Gaza_by_Jaber_Badwen_IMG_5646.jpg

地球市民講座は、かわさき国際交流民間団体協議会と（公財）川崎市国際交流協会の共同主催によるもので、すべての人々が平和な社会で生きられるように、その時代の社会問題を理解しようと企画しています。皆様の参加をお待ちしています。

日時：2026 年 3 月 14 日（土）
午後 1 時～4 時

会場：川崎市国際交流センターホール

参加費：500 円（当日会場にて現金でお支払いください）

定員：先着申込制 200 名まで
（申込み受付は 1 月 15 日 10 時から）

申込み：右 QR コードからお申し込みください



早尾 貴紀教授の略歴

1973 年生まれ、東京経済大学教授。

専門は社会思想史。

2002～04 年、ヘブライ大学客員研究員として東エルサレムに在住し、西岸地区、ガザ地区、イスラエル国内でフィールドワークを行う。

現在は東京経済大学で教鞭を執り、社会思想史やナショナリズム、共生、多文化主義などのテーマについて研究しています。早尾氏の研究は、主にパレスチナ／イスラエル問題やユダヤ人問題、民族問題に焦点を当てています。さらに、ユダヤ民族の存在意義や、ユダヤ人国家の設立が持つ意味を思想史的に考察しています。



主な著書

- 『イスラエルについて知っておきたい30のこと』(平凡社)
- 『国ってなんだろう?』(平凡社)
- 『パレスチナ／イスラエル論』(有志舎)
- 『ユダヤとイスラエルのあいだ』(青土社)
- 『パレスチナ、イスラエル、そして日本のわたしたち』(皓星社)
- 『希望のディアスポラ——移民・難民をめぐる政治史』(春秋社)
- (訳書) サラ・ロイ『ホロコーストからガザへ』(青土社、岡真理、小田切拓との共訳)
- (訳書) ジョー・サッコ『ガザ欄外の声を求めて』(Type Slowly)
- (訳書) イラン・パペ『パレスチナの民族浄化』(法政大学出版局、田浪亜央江との共訳)

イスラエルはパレスチナをどうしようとしているのか

ガザ = ストロフ
ーパレスチナの吟ー

GAZA = STROPHE
PALESTINE



監督・撮影：サミール・アブダラ、ケリディン・マブルーク
HP <https://lime010328.studio.site/>

この映画は

ガザの地で生きる人々の姿を丁寧に描きながら、同時にパレスチナ問題の背景にある西洋諸国による二重基準、構造的暴力について浮かび上がらせる。

多くの人々が、これは明らかにジェノサイドだ、と声を上げる悲惨な状況が続く中（2024 年 8 月現在）、人々の姿と歴史を知ることから変わる可能性を問いかける。

人々はずっとカタストロフを生きてきた

映画の題名『ガザ＝ストロフ』は「ガザ」と「カタストロフ」を一つの言葉にしたもの。「カタストロフ」とは、「大参事」「破局」「絶望的な結末」を意味し、『突然の大きな変動や崩壊、絶望的な状況』を指す言葉。

2008 年 12 月末から 2009 年 1 月にかけてイスラエルによるガザの大規模侵攻が勃発。監督のサミール・アブダラとケリディン・マブルークは、停戦の翌日にパレスチナ人権センターの調査員と共にガザに入る。爆撃で両親兄弟を失った子ども、目の前で家族を銃撃された男性、土地を奪われ逃げてきた人々…「顔を持つ」一人一人の証言が記録されるとともに、パレスチナを代表する詩人、マフムード・ダルウィーシュの詩が引用され、ガザの人々が生きてきた歴史と記憶が呼び起こされる。

申込方法：右 QR コードからお申し込みください

